私の視点

感染症予防は「知識」
ローカルNGO支援を

菅波　茂氏　（AMDA（アジア医師連絡協議会代表））

沖縄サミットに集う主要八カ国の「経済先進国」に対して、「NGO先進国」という言葉を紹介したい。

アジア地域ではフィリピン、バングラデシュ、ネパール、インド、パキスタンなどがその代表国である。ただし、これらNGO（非政府組織）は地域コミュニティーの発展のために貢献しているローカルNGOのことを言い、決してメディアに登場することもなく日本にいる私たちには分かりにくい存在である。

実際は、政府の行き届かない分野や地域を民間のエネルギーでカバーしている不可欠の存在である。メディアによく登場する欧米のインターナショナルNGOが空飛ぶ大鵬なら、このローカルNGOは地面を這（は）う虫とも言える。

沖縄サミットではエイズ、マラリア、結核などの感染症対策が議論され基金の創設が検討されているとのこと。誠に喜ばしいことである。アジア地域においてもこれらの感染症対策は深刻な問題である。

私が代表理事をしている国連NGOであるAMDA（アジア医師連絡協議会）はアジア地域ではカンボジア、ミャンマー、フィリピン、インドネシア、ネパール、インド、パキスタン、アフガニスタンなどで地域コミュニティーのために母子保健やプライマリーヘルスケアをはじめとする種々のプロジェクトを実施しているが、エイズやマラリアなどの深刻な状況に直面している。

これらの感染症の深刻化の背景には「貧困と知識の欠如」が考えられる。貧困の改善は一朝一夕には難しい。しかし知識の啓もう普及は急ぐべし。なぜなら感染症はコッホの三原則という「感染源―感染経路―宿主」のいずれかへの対策が有効であり、知識が非常に有効な予防対策となるからである。

成功例の分析が成功に直結する。日本では第二次世界大戦敗戦後のないないづくしの状況で人々の健康を守り、増進してきた成功事例がある。

保健所の地域コミュニティーにおける保健衛生活動や学校における衛生教育とともに、地域コミュニティーの婦人会、栄養改善を推進する会、母と子の健康を守る会などの各種団体による衛生教育や健康教育などの啓もう活動である。これは純粋なボランティア活動でもあった。すなわち、現代のNGOやNPO（民間非営利組織）活動そのものである。

沖縄サミットにてエイズ、マラリア、結核などの感染症対策の基金が創設されるなら下記のことを提案したい。

①ローカルNGOの役割の再認識と感染症対策機能の育成。

②ローカルNGOに対する継続的支援策の強化。

③日本の地域コミュニティー各種団体の役割の体系化と紹介。

④すでに存在している日米コモンアジェンダとの連携強化。

⑤外務省の草の根無償資金協力との連携強化。

簡単に言えば、すでに各国で積極的に活動しているローカルNGOという社会資源と日本の第二次世界大戦後の困難な時期を克服した成功例をリンケージさせたうえで、感染症対策に関する知識の啓もう普及活動を幅広く実施するという現実的対応策に基金が活用されることを提言する。

すがなみ・しげる　1946年広島県生まれ。岡山大医学部大学院卒。81年菅波内科医院開業。84年AMDA、91年AMDA国際医療情報センター設立。京大などで非常勤講師を務める。著書に『遥なる夢』『AMDAの提言』などがある。